

3 3 . 食用野生きのこの人工栽培試験

(2) きのこの栽培試験

鳥海 晴夫

〔目的〕

1976年から4ケ年にわたって都内の野生きのこの分布状態を調べたところ、食用野生きのこのが約150種確認された。これらのうち、味が優れ市場性が期待されるハタケシメジやヌメリスギタケなどの野生きのこの人工栽培技術を確立する。

〔方法〕

原木栽培試験は1990年及び1991年に接種したヌメリスギタケ、ヌメリスギタケモドキ、マツオウジ、チャナメツムタケ、スギヒラタケの発生量調査を行った。1992年4月はヌメリスギタケ、ヌメリスギタケモドキを1月初旬伐採のコナラ原木に各20本ずつ接種し、マツオウジを3月伐採のアカマツに22本接種した。接種及び管理は前年同様の方法で行った。ほだ付率は各試験区ごとに8本ずつ抽出し、12月上旬剥皮して調査した。

P・P袋利用栽培試験は、1991年に接種したヌメリスギタケ、ヌメリスギタケモドキ、マツオウジの発生量調査を行った。1992年はコナラ原木にムキタケ、チャナメツムタケを接種し、スギ原木にスギヒラタケを接種した。接種方法及び発生操作は前年同様である。

〔結果〕

1. 原木栽培試験 (図-1、2、3、表-1)

1990年に接種したヌメリスギタケ、ヌメリスギタケモドキは、雑菌の被害が甚だしく発生量も少ないことから発生量調査を終了した。3ケ年の総発生量をみると、ヌメリスギタケ、ヌメリスギタケモドキともに、樹種ではサクラからの発生が良好で適樹種の一つと考えられた。シデ、エゴノキは樹皮の剥がれが早く、発生量もサクラの10%程度とわずかであった。ヌメリスギタケモドキの系統別では五日市-1が良好であった。ヌメリスギタケは丹波山-1と1系統であるが、ヌメリスギタケモドキの五日市-1と同程度の発生量があり良好であった。

1991年に接種したなかではムキタケだけの発生があった。樹種では接種年にサクラからのみ発生がみられたが、2年目はコナラ、サクラとも発生量が良好であった。

1992年に接種したヌメリスギタケ、ヌメリスギタケモドキは、ほだ付率が表面×横断面が17%以下と低く、発生量もわずかであった。

2. P・P袋利用栽培試験 (表-2、図-4)

1991年に接種したヌメリスギタケ、ヌメリスギタケモドキは発生量が良好で、マツオウジも初めて発生がみられた。P・P袋利用栽培は、活着も確実に単位材積あたりの発生量が多く実用的な方法と思われが、原木を滅菌するオートクレーブが高価なため、滅菌方法を改善する必要がある。

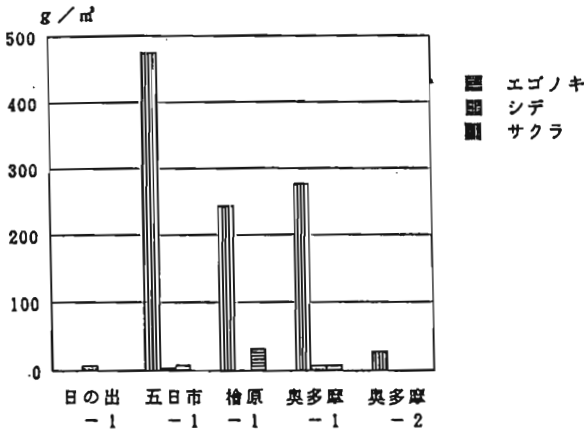


図-1 ヌメリスギタケモドキ3ヶ年総発生量

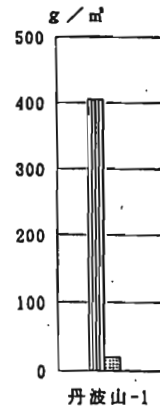


図-2 ヌメリスギタケ3ヶ年総発生量

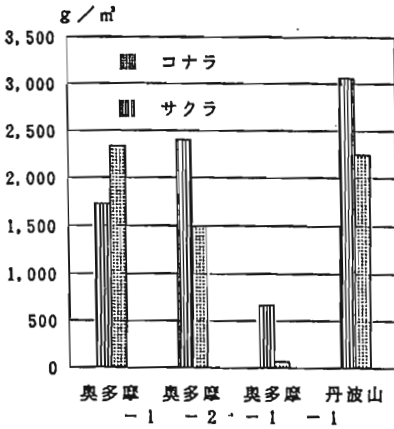


図-3 ムキタケ2ヶ年発生量

表-1 コナラによる野生きのこの発生量 (1㎡当たり)

供試菌	系統	ほだ付率 %	1992年 g
ヌメリスギタケ	丹波山-1	4.9	87
	F3-00	3.9	0
ヌメリスギタケモドキ	五日市-1	8.8	169
	檜原-1	16.9	0

※ ほだ付率は表面×横断面

表-2 P・P袋栽培のよる発生袋数

供試菌	系統	ほだ木	活着数 袋	発生数	
				1991年 袋	1992年 袋
ヌメリ スギタケ	丹波山-1	半割	9	8	9
		2本	9	2	6
ヌメリスギ タケモドキ	檜原-1	半割	4	0	4
		1本	8	2	8
		2本	10	0	10
マツオウジ	稲城-1	半割	10	0	0
		1本	9	0	0
		2本	6	0	2

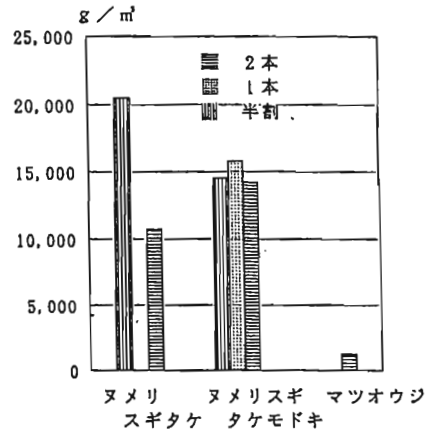


図-4 P・P袋栽培2か年発生量